

医療ルネサンス

No.6230

患者学

食べる

4/5

胃ろうから口へリハビリ



藤本さん（左）のリハビリで胃ろうを外せた鹿島さん（広島県呉市の成寿園で）

広島県呉市の鹿島和昭さん(77)は2015年6月、おなかに穴を開けて管を通す胃ろうをつくった。同年3月に骨折し入院したが、その間、病院食を嫌ってほとんど食べなかった。同市の老人保健施設「成寿園」に5月に移った時には体重が20kg減り、体力がなくなっていた。

妻の裕子さん(72)は「ずっと胃ろうから栄養を入れてる延命治療になるのでは、と不安だった」と話す。そこで長女(45)がインターネットですべて体力回復後に胃ろうを外せるかどうか調べた。その結果、同市の藤本歯科クリニックが胃ろうを外すための摂食嚥下リハビリをしていることを知り、成寿園施設長で医師の榎知果夫さんに相談。施設と歯科クリニックが連携し、回復に取り組みることになった。

食べる動きは、舌や喉などが調和し、食道側に食べ物を送り込んでいる。食べずにいると口の中がうまく動かなくなり、リハビリが必要になる。歯科は、口の中の清掃や入れ歯の調整で高齢者と関わることも多く、食事に関する本人や家族の声に配慮、リハビリを始める施設が増えている。同クリニック院長の藤本文彦さんは「病院でリハビリの経験がある看護師を雇うなど体制充実」に努めていると話す。

藤本さんが初めて和昭さんを診察した日は、胃ろうによる栄養摂取を始めて7日目。ベッドから体を起こして食べる姿勢を取れるだけの体力が戻っていた。食道側に誤って入らないように、頭を下げた姿勢を取らせると、お茶のゼリーを飲むことができた。連日、クリニックの看護師と歯科衛生士、施設職員らが、口の中を氷で刺激して喉の動きをよくするアイスマッサージや息を吐き出す呼吸訓練などを行った。和昭さんは着実に回復し、胃ろうを外した。元氣を取り戻した和昭さんは「一生懸命にやってくれた」と笑った。

<メモ> 摂食嚥下関連医療資源マップ
<http://www.swallowing.link/>

藤本さんが初めて和昭さんを診察した日は、胃ろうによる栄養摂取を始めて7日目。ベッドから体を起こして食べる姿勢を取れるだけの体力が戻っていた。食道側に誤って入らないように、頭を下げた姿勢を取らせると、お茶のゼリーを飲むことができた。連日、クリニックの看護師と歯科衛生士、施設職員らが、口の中を氷で刺激して喉の動きをよくするアイスマッサージや息を吐き出す呼吸訓練などを行った。和昭さんは着実に回復し、胃ろうを外した。元氣を取り戻した和昭さんは「一生懸命にやってくれた」と笑った。